新美南吉作「手袋を買ひに」の重層構造

安藤重和

一

「手袋を買ひに」は、新美南吉が二十歳の時に書いた童話であるが、その読解は必ずしも容易ではない。「町の灯」を見て人間への恐怖心から足が「すくんでしま」った母狐は、何故、「坊やだけを一人で町まで行かせること」にしたのか、又、「帽子屋さん」は「子狐」が間違えて「狐の手」を出してしまったのに、何故、摑えもせずに「手袋」を売ってくれたのか、などの大きな疑問が残るからである。以下、『校定　新美南吉全集　第二巻』(1)所載の、「自筆原稿」本に基づく「手袋を買ひに」の本文に依拠しつつ、これらの疑問点に関する考察を試みることとしたい。

二

母狐が子狐の為に「手袋」を買ってやろうと思ったのは、「雪を知らなかった」子狐が初めて見る雪に興奮して「雪の上を駈け廻」り、「濡れて牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしだし」たのがきっかけであった。その手を見た母狐は、

「かあいい坊やの手に霜焼ができてはかわいさうだから、夜になったら、町まで行って、坊やのお手々にあふやうな毛糸の手袋を買ってやらう」と考える。「坊や」の「霜焼」を防ぐ為に必要な「手袋」を買う為には「町まで行」くしかないのである。即ち、「町まで行く」のは「坊や」の「霜焼」を防ぐ為にである点に注意しておこう。「夜になったら」とあるのは、人間に見つからないように、との配慮が既に働いていることを窺わせる。「買ってやらう」という表現は、この時点においては、母狐自身で手袋を買うつもりであったことを示すこと勿論である。

さて、母狐が子狐一人だけを町へ行かせることになる場面を検討しよう。先ず、当該本文を引用する。

暗い暗い夜が風呂敷のやうな影をひろげて野原や森を包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがってゐました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子供の方はお母さんのお腹の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あつちやこつちを見ながら歩いて行きまし

た。

やがて、行手にぽつつりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちやん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ。」とききました。

「あれはお星さまぢやないのよ。」と言つて、その時母さん狐の足はすくんでしまひました。

「あれは町の灯なんだよ。」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行つて、とんだめにあつたことを思出しました。およしなさいつて云ふのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗まうとしたので、お百姓に見つかつて、さんざ追ひまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちやん何してんの、早く行かうよ。」と子供の狐がお腹の下から言ふのでしたが、母さん狐はどうしても足がすゝまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「暗い暗い夜」の訪れを撥ね返すかのように「白く浮びあがる雪景色の中を、「親子の銀狐」は町を目指して「洞穴」を出る。子狐が「お母さんのお腹の下へはいりこんで」歩いて行くのは、町へ初めて出かける子狐は町への道中に不安を感じ母狐に保護してもらいたいのであろう。又、「寒い冬」の雪の夜の寒気を避ける為にも有効であったであろう。町への道中に不安と同時に好奇の思いを抱いて「あつちやこつちを見ながら歩いて」行く子狐は「行手」の「あかり」を「お星様」と間違えてしまう。母狐が、それを否定し、「あれは町の灯なんだよ」と心で認識した途端、その言葉を子狐に対し口にする前に、既に「母さん狐の足はすくんでしま」ったのである。「町の灯」と認識した途端、間髪を入れずに生じた「足のすくみ」は、母狐が「町の灯」に対し如何に大きな恐怖を発生させたかを物語っている。足がすくむほどの恐怖心を母狐が抱いたのは、母狐が「ある時町へお友達と出かけて行」って、「およしなさいつて（母狐が）云ふのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗まうとし」、「お百姓に見つか」り、母狐もその巻き添えを食って、「さんざ追ひまくられて、命からがら逃げた」経験からであった。即ち、「命からがら逃げた」時の強烈な恐怖体験が「町の灯」を認識した途端、生々しく蘇り、母狐の足を金縛りにしたのである。母狐にとって、これから行こうとしている「町」とは生命に危険を感じさせる場所であった。だが、驚くべきことに、それでも母狐は、町へ行こうとしている。子狐が「母ちやん何してんの、早く行かうよ」と言った時に、「母さん狐はどうしても足がすゝまないのでした」とある、この「どうしても」は、母狐が子狐と一緒に町へ行く為に足を進めるべく必死の努力をしたことを物語っている。「かあいい坊やの手に霜焼ができてはかわいさうだから」「毛糸の手袋を買つてやらう」という母狐の思いはそれほどに強烈なものであったのだ。

「命からがら逃げた」恐怖体験の想起は、母狐の足を完全にすくませてしまったのだけれど、子狐の為に手袋を買ってやりたいという母狐の母性本能的意志まで萎縮させたわけでなく、母狐は町へ行くことを望み続けている。そして、「……母さん狐はどうしても足がすゝまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」と文章は展開するが、この部分の「しかたがないので」に注目して、「母さんぎつねは足が全然動かなくなったので、子ぎつねにもう手袋を買うのはやめて帰ろうなどと提案してみたが、子ぎつねはいうことを聞かない。それどころか、母さんが行けないのなら自分一人で行くなどと言い出」し、母狐は「しかたなくそれを許したのだ、と読み取る説[2]がある。だが、私には理解できない。というのは、「そこで」という語が、直前部「どうしても足がすゝまないのでした」を受けて用いられているからで、この部分の意味は、「どうしても足がすゝまないので、しかたがないので」となろう。つまり、「坊やだけを一人で町まで行かせることにな」ったのは、母狐の足が母狐の意志に反して「どうしても」「すゝまなかった」からという物理的原因によるのであり、決して、「もう手袋を買うのはやめて帰ろう」などという考えが母狐の頭の中に浮かんでいるわけではないのであろう。「かあいい坊や」に手袋を買ってやりたいという母狐の一途な思いは、自分の足がすくんで動かなくなってもなお持続され、遂に「坊やだけを一人で町まで」手袋買いに行かせることになった。「かあいい坊や」の為に手袋を買ってやること自体が目的化され至上命題となって、母狐を圧さえつけている。

だが、客観的に見れば、「命からがら」の経験をし足がすくむほどの強い恐怖感を覚える「町」へ、幼くて何も知らない「坊やだけを一人で」行かせることは、あまりにも危険な判断であり、母狐はその足がすくんだ時点で「町」という恐しい場所へ行くことを断念し子狐と共に森の洞穴へ引き返すべきであったことは明らかであろう。子狐が「町」で捕まえられるかも知れないことに比べれば、子狐の手にできる「霜焼」など大した問題になりはしまい。

西郷竹彦氏は、「坊やだけを一人で町まで行かせる」ことにした母狐に、「継母的な人物像」を、（新美南吉の継母体験に言及しつつ）指摘された上で、

本当にあたたかい子ぎつね思いのお母さんであれば当然あんなこわい思いをすればするほど、こわさと愛情とのかっとうを抱きながら、子ぎつねと共に町へ行くというのが本来、だれもが納得できる筋なんですね。だけど、そうならないところにこの作品の破たんがあります[3]。

と述べておられる。

だが、「本当にあたたかい子ぎつね思いのお母さん」であれば必ず適切な判断を子狐の為に下してやるものなのであろうか。愛情の問題と判断力の問題とは別物ではないのか。なるほど、

判断力の充分な母親が我が子を危険の中に意図的に突き落としているのであれば、その母親を「継母的」ということも許されるのかも知れない。しかし、実は、この母狐は、判断力においてかなり未熟な面を露呈させているのだ。それは「坊やだけを一人で町まで行かせ」たことだけに限らない。

母狐は、「坊やだけを一人で町まで行かせること」にした後、「坊や」の安全を計るべく、「片方」の手だけを「人間の子供の手」に変えてやる。そして、「人間の子供の手」の方を帽子屋に見せるべきで、絶対にもう一方の「狐の手」の方を見せてはいけないことを繰り返し言い聞かせる。何故、そういうことを繰り返し言い聞かせる必要があるのかというと、母狐は子狐が「狐の手」の方を帽子屋にさし出してしまう可能性を認識しているからに他ならないが、それならいっそ、子狐の手を両方とも「人間の子供の手」に変えてやればよいはずである。だが不思議なことに、母狐は子狐の手を両方とも「人間の子供の手」にするという発想は全く持っていないらしい。「両手とも人間の手に変えてあげたいけれど、私の能力では片方の手を変えてあげるのが精一杯なの」などという類の台詞なども見当たらない。この母狐は、片方の手だけを「人間の子供の手」に変えることを大前提にしていて、あとは、「狐の手」の方を帽子屋に見せないように、と繰り返し幼い子狐に言い聞かせるばかりである。

恐しい「町」へ、「かあいい坊や」を、わずかに片手のみ「人間の子供の手」にしてやっただけの状態で送り出し、子狐の正体が帽子屋にばれないようにと期待する母狐の判断の未熟さは否定し難い。結果的に、子狐は、帽子屋でまばゆい光にめんくらって、「お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手」を出してしまっている。子狐の片手だけを「人間の子供の手」に変え、その手の方を帽子屋に見せるように繰り返し言い聞かせてさえおけば、子狐の正体はばれないであろう、と考えた母狐の判断ミスは明白である。

又、母狐の足をすくませることになった恐怖体験、つまり「町」で「お百姓」に「さんざ追ひまくられて、命からがら逃げた」事件を根拠に、「町」そのものを恐怖の対象と即断し、かつ、「人間はね、相手が狐だと解ると（略）摑まへて檻の中へ入れちやふんだよ、人間ってほんとに恐いものなんだよ」という判断を導き出してしまう。母狐が「さんざ追ひまくられ」たのは、「お友達の狐が、或る家の家鴨を盗まうとした」悪事が原因であり、例え「人間」であっても「悪事」を働けば「追ひまくられる」はずなのに、母狐はそこは抜かして、「お百姓」に「追ひまくられ」たのは、人間に自分達が「狐だと解」ったからだ、と思い込んでしまっているのである。

なるほど、母狐の足がすくんだ原因を語る地の文の部分では、母狐の「思ひ出し」に即した形で、「或る家の家鴨を盗まうとしたので（略）さんざ追ひまくられて」と語られており、「悪事」が原因で「追ひまくられ」たという図式が把えられている

ので、母狐もその点に全く気付かなかったのではないかも知れぬが、しかしながら、この重要な点がその後の母狐の思考回路からは、不思議なほどに欠落してしまっているのである。

重要な点を欠落させた思考は不正確な判断を生む。母狐の体験から帰納し得るのは、「このお百姓は悪事を働く狐を追ひまくる」ということ程度であるのに、「人間は『相手が狐だと解ると』全ての狐を『摑まへて檻の中へ入れちやふ』のだ」という拡大解釈をしてしまう。「人間」とまで言わずにたとえ「お百姓」と限定したところで、彼が正直な良い狐でも摑まえるかどうかは全く判断できないはずなのに。

このように見て来ると、母狐が子狐を一人だけで町へ行かせたのは、母狐の判断力未熟の故であろうことが見えて来よう。一人だけで町へ行かせることになった子狐に、町の様子、帽子屋さんへの対応の仕方などを母狐なりに懸命に教え、子狐の安全を計ってやっていることを考えれば、母狐が「本当にあたたかい子ぎつね思いのお母さん」であることに毫も疑いの余地はあるまい。

三

次に、「帽子屋さん」は「子狐」が「狐の手」を出してしまったのに、何故、摑えもせず「手袋」を売ってくれたのか、という問題を考えてみよう。当該本文を引用する。

たうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教へてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電灯に照らされてかかってゐました。

子狐は教へられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晩は。」

すると、中では何かことこと音がしてゐましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を——お母さまが出しちやいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまひました。

「このお手々にちやうどいい手袋下さい。」

すると帽子屋さんは、おやおやと思ひました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言ふのです。これはきつと木の葉で買ひに来たんだなと思ひました。そこで、

「先にお金を下さい。」と言ひました。子狐はすなほに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指の先にのつけて、カチ合わせて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉ぢやない、ほんとのお金だと思ひましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言つて又、もと来た道を帰り始めました。

従来、「狐だとわかっていて摑えもせず手袋を売ってくれたのは、帽子屋さんがやさしい人であったからである」という読

みが多く行われて来たように思う。なるほど、この帽子屋さんは、戸のすきまからさしこまれた「狐の手」を見ても即座に狐を摑えたりはしなかった。その限りにおける「やさしさ」は認めざるを得まい。だが、この「やさしさ」を強調し過ぎるのは危険である。というのは、この帽子屋さんは、寒い冬の雪の夜、手袋を買いに来た「子狐」を暖い店内には遂に一歩も入れてやらずに帰らせているのである。彼は、来訪者の確認と金品の受け渡しの為に必要な最少限の空間として、戸を「一寸ほど」開けたけれど、決してそれ以上開けようとはしなかった。「狐の手が手袋をくれと言ふのです」と認識しても、その買物客の顔さえ見ようとはしない。客の顔を見ることより、少くとも夜間の場合は、戸のすきまを「一寸ほど」に保つことのほうが重要なのであろう。何と言う用心深さであろうか。又、普通は、商品を買ってくれた客に対し、商人の側から「お礼」の言葉を発するものと思うが、この帽子屋さんは手袋を「子狐の手に持たせてや」ったのみで、「お礼」を言った形跡はない。逆に、「お礼」は子狐から帽子屋さんに向けて発せられている。

この帽子屋さんの性格として目立つのは、「用心深さ」の方であり、「やさしさ」の方は特に並みはずれているとも思えない。従来、「狐とわかっていても手袋を渡してくれたからやさしい」「やさしい人だから狐に手袋を渡してくれたのだ」という形の循環論が発生していた恐れはないであろうか。

作品冒頭で、雪に反射するお陽様の強い光を目に受けて、「眼に何か刺さった」と思って「あはてふため」いていたほどに、強い光に弱い子狐は、帽子屋の戸のすきまから漏れ出た光の「まばゆ」さに「めんくらって」、母狐が人間を化かす為に唯一仕組んだ「人間の子供の手」の方をさし出さずに、本来の「狐の手」の方を、正直にさし出してしまうことになった。つまり、子狐はまばゆさにめんくらったおかげで人間を化かさずに済んでいる。（この後もあわてて「人間の手」の方を出し直したようには書かれていない。帽子屋も「子狐の手」の方に手袋を渡している。）

帽子屋は「狐の手」を見て、「これはきっと木の葉で買ひに来たんだな」と確信してしまう。帽子屋は、「狐」と言えば「人を化かすもの」と思い込んでいるようだ。人を化かさない狐がいるなどとは想像もしていない。だから、「きっと」という強い断定口調になっている。そこで、「先にお金を下さい」と言う。何故「先に」と言うかというと、手袋の方を先に渡せば持ち逃げされるとでも思っているからであろう。「狐」であるということだけで、子狐は疑われているのである。「お金を下さい」と口では一応言いながら、帽子屋は心の中で「どうせ木の葉にちがいない。本物のお金のはずがない。」と決めつけているはずである。だから、子狐から手渡された白銅貨を目で見た段階でそれが本物と寸分違わぬことを確認し得たはずであるが、その程度では彼は納得できず、「木の葉」ではない、という決定的な証拠を求めて、白銅貨を「カチ合せ」ねば気が済

まない。そして、「チンチンと良い音がし」た時、彼の今までの思い込みが一挙に崩れ去った。「これは木の葉ぢやない、ほんとのお金だ」と認識した時の彼の驚きを想像すべきである。この子狐は正直に「ほんとのお金」で手袋を買いに来ていたのだ、それなのにその子狐を自分は頭から疑ってかかっていた、申し訳ないことをした、と帽子屋は思ったことであろう。正直な子狐に心打たれた帽子屋は、自分も正直に手袋を「子狐の手に」持たせてやるのである。

だから、白銅貨二枚の金額が手袋代に見合うか否かなど、帽子屋にとってこの際どうでもよかった。彼はそんなことは全く問題にもしていない。ただし、「狐」というものは人を化かすに決まっていると帽子屋が思い込んでいたその「狐」が正直に「ほんとのお金」を持って来たという点に帽子屋は心打たれているのであり、子狐はあくまでも「人間」ではなく一段下の「狐」として扱われている。だから、「狐」から「ほんとのお金」を受け取っているのにも拘わらず、帽子屋の心に「買ってもらった」という意識は生じない。子狐の正直さに応えて、手袋を「持たせてやりました」というわけである。帽子屋の側からは、感謝の言葉は出ない。又、「狐」を店内に入れてやろうとも思わない。

このように考えてくると、子狐が手袋を手渡してもらうことができたのは、「狐」が「ほんとのお金」を持っていったからであることが知られよう。たとえ、子狐が母狐の教えの通りに「人間の子供の手」になっている方の手を差し出していたとしても、子狐が持参したものが「木の葉」のお金であったとしたら、この用心深い帽子屋に正体を見破られずに済んだであろうか、大いに疑問である。

さて、この「ほんとのお金」を子狐が持って行ったのは、母狐が「持って来た二つの白銅貨を」別れ際に子狐の手に「握らせて」送り出したからであった。では、母狐は何故「木の葉」ではなく「白銅貨」を子狐に持たせたのであろうか。それは、「木の葉」のお金では検査された時偽物と見破られることを予見したから、などということではない。母狐は何かを特別考えた様子もなく、ごく自然に「白銅貨」を子狐に握らせてやっている。ここで、かつて、「お友達の狐が、或る家の家鴨を盗まうとした」時、母狐はそれを事前に「およしなさい」と制止していたことを思い出すべきである。母狐は「盗み」という行為を悪事として退ける正直な狐であった。だから、母狐は最初から、「かあいい坊や」の為に「手袋」が必要だから「木の葉」で人間を欺いて盗んで来てやろう、などとは考えもしていない。当初から、「坊やのお手々にあふやうな毛糸の手袋を買つてやらう」と、「買う」という正直な発想をしているのであり、「白銅貨」つまり「ほんとのお金」で代金を支払うことは当然のこととして始めから予定されていたのである。

なるほど、母狐は、子狐の手を片方だけであるにせよ「人間の子供の手」に変えて、人間を化かそうとした。しかし、この

母狐による唯一の「化かし」は、「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ」と思い込んでしまっている母狐が、手袋を売ってもらいたくて止むを得ずおこなった、最低限（つまり、「片手」しか「人間の手」にしていない）の「化かし」であり、しかも、その「化かし」によって人間に実害を与えることはないものであった。

このような点に注意すれば、子狐が帽子屋へ持参した「ほんとのお金」は、母狐の「正直な性格」に由来するものであることが理解されよう。即ち、子狐を危機から守っているのは、本質的には「母狐の正直な性格」であったのである。だが、母狐自身はそれを意識化しておらず、実際にはどうでもよかった「手の出し間違い」の問題ばかり心配していた訳である。母狐の判断力・思考力はかなりの限界を持っている。

母狐によって認識されている世界と、母狐の認識が及び得ていない世界の二つが、この作品の中で、複雑に絡まり合いながら、重層的に存在しているのである。「手袋を買ひに」は「童話」として書かれているが、決して単純な作品ではないのである。

四

結局、母性愛溢れる母狐が、しかし、判断力が未熟であったが為に、子狐をかなり危険な状態に落とし入れてしまうが、母狐が具備していた「正直な性格」というものが本質的に子狐を危機から救い出している、というこの作品の重層構造が見えて来たと思う。この重層構造をしっかりと踏まえることが、この作品を読解する為の第一歩であるはずである。まだ、読解上指摘すべきことは多いが、今回は、これでとどめる。

注(1)　『校定　新美南吉全集　第二巻』（大日本図書　一九八〇・六）

(2)　甲斐睦朗氏「『手ぶくろを買いに』の表現」（実践国語研究　別冊79　新美南吉「手ぶくろを買いに」教材研究と全授業記録　明治図書　昭63・6）

(3)　「西郷先生に聞く『手ぶくろを買いに』をどう扱うか」（文芸研教材研究ハンドブック　5　新美南吉＝手ぶくろを買いに　明治図書　一九八五・二）なお、西郷竹彦氏「『てぶくろを買いに』論――矛盾はらむ母親像――」（日本児童文学　別冊　新美南吉童話の世界　ほるぷ社　一九七六・七）参照。